

《トゥールのモーセ五書》写本における物語絵の作画原理

宮内ふじ乃（立教大学）

現在フランス国立図書館に所蔵されている《トゥールのモーセ五書》、別称《アシュバーナムのモーセ五書》(Paris, B.N.F., Ms. nouv. acq. lat. 2334)は、ラテン語版現存最古の挿絵入りモーセ五書として名高い写本である。制作地はここ数年ローマが有力視されはじめ、6 - 7世紀頃と考えられてきた制作年も、5世紀にまで遡る可能性が示されるなど、写本の成立について今なお活発な議論が行われている。

本写本には創世記から民数記までの現存 18 ページの物語絵があり、そのほとんどが 1 ページ内に複数場面を詰め込む形式からなる。画中の物語は時に聖書の時系列を無視するかのよう、画面上に埋め込まれている。こうした画面構成は欧米の研究者から、恣意的、ランダムあるいは装飾的という言葉で説明されることが多い。

しかしながら、挿絵を観察してみると、きわめて入念な作画原理に基づく構成であることが指摘できる。絵に残された指示文の痕跡から、場面配置を指示していたのは写字生、それを実行したのは挿絵画家であることが判明している。聖書本文を熟知した写字生の構想に基づく画面構成は、聖書本文を単に時系列に沿って図解することを目指していない。

本発表では、《トゥールのモーセ五書》の物語絵の作画原理を、1. 逐次的連続性、2. 場所優先の論理、3. 時空間の有機的な連繋方法としての移動と行動の論理、4. テーマの論理に分類し、各論理の競合と補完の具体相を考察する。

逐次的連続性が貫かれているのは「天地創造」(fol.1v)である。原初の段階から 3 日目の神の創造行為までが時間の経過とともに左上から右下まで順を追って展開する。しかしこれ以外で、作画上最も優先されているのは出来事が生起する場所である。複数場면을 1 ページ内に適切に配置するための土台として、また物語を論理的に分節化するために、場所の提示が重視される。それゆえ町や自然の景観は省略されない。各地点が隣接した位置関係にあれば並置され、遠隔地ならば配置をずらし、人や動物の行動で各地点を連繋する。この空間配置の主導性が時間を吸収し、登場人物たちの地点間の移動や、しぐさや視線、あるいは行動によって物語全体の因果関係と筋の流れをつむいでいく。

時間や場所ではなく、テーマの論理に基づく挿絵として「カインとアベル」(fol.6)が挙げられる。本写本中最も複雑なこの挿絵は、三色の帯で分割された三段の画面に、テーマ別に出来事を配した上で、アベルに予型されたキリストの犠牲と救いを暗示する。また「ノアの箱舟と洪水」(fol.9)と「下船」(fol.10v)は、2 ページを使って時空間を予型論的に連繋し、人物の行為や動物の移動の描写によって、キリストの救いをノアを通して現在化している。こうした挿絵からは、キリストとの交わりに導く信仰教育の狙いを読み取ることができる。